国立文楽劇場での演奏風景（写真提供:国立文楽劇場）

人形浄瑠璃文楽座
三味線

鶴澤（つるさわ） 燕三（えんざ） さん

プロフィール

1959年、神奈川県葉山町生まれ。父親の海外赴任のため、幼稚園時代をタイ、小学校6年生の1学期までをハワイで過ごした。高校卒業後の77年に国立劇場文楽第4期研修生となる。研修終了後の79年4月、文楽三味線の五世鶴澤燕三（85年、人間国宝）に入門、鶴澤燕二郎と名乗る。同年7月に大阪道頓堀の朝日座で初舞台。今年4月公演から六世鶴澤燕三を襲名。受賞歴は86年の文楽協会賞、87年の大阪文化祭賞奨励賞、98年の大阪舞台芸術賞奨励賞など多数。

地道に、文楽義太夫節の芸を伝承していきます

大阪市中央区の国立文楽劇場で、文楽の4月公演が行われている。演目の中でも注目を集めているのが、三味線の鶴澤燕二郎さんが六世鶴澤燕三(えんざ)を襲名する襲名披露狂言「ひらかな盛衰記 松右衛門内(まつえもんうち)より逆櫓(さかろ)の段」である。

江戸時代に大坂で生まれた人形浄瑠璃文楽は、浄瑠璃を語る大夫(たゆう)、三味線弾き、人形遣いの"三業"の演者による人形芝居だ。戦後、後継者難に悩まされたが、63年には文楽協会が設立され、72年からは後継者育成事業の研修制度がスタートする。

この制度で技芸員となったのは、今年3月修了の21期生までで計42人（大夫11人、三味線11人、人形遣い20人）。六世燕三さんも、研修生から文楽入りしたひとりで、98年に三味線の野澤錦弥さんの五世野澤錦糸襲名に継ぐものであり、研修が確実に後継者を育てていることを証明する慶事として、注目を集めるゆえんなのだ。

◇偶然が重なり文楽へ◇

六世燕三さんが三味線に興味を持ったのは、高校3年生の冬休み。「NHK教育テレビで民謡や津軽三味線、義太夫など三味線の特集をやっているのを見て、弾いてみたいと思った」のがきっかけ。友人の関係者から民謡教室を紹介してもらい、通い始めるのである。この時期、両親は海外赴任中だった。

「楽しかったですね。高校生で覚えも早いですから」という三味線。「卒業後も三味線を続けたい」と、阿波の人形浄瑠璃を研究していた、大学生のいとこに話したところ「国立劇場で文楽の研修生を募集している。三味線もある」と聞き、その場で国立劇場に問い合わせのダイヤルをすることになる。

こうして研修所入りを自ら決めるのだが、知らせを聞いて急きょ海外赴任先から帰国した両親も、強い決心に折れざるをえなかったとか。「研修生募集は2年に1回だったのですが、たまたまその年は3期生がいるのに4期生を募集したんです。両親が海外赴任中だった事もそうですが、いろんな偶然が重なったおかげで入れました（笑）」。2年の研修後、五世燕三に入門。対面で、あるいは舞台裏で見聞し芸を磨くこと27年。「竹本住大夫師匠から襲名のお話を頂いた時は、過ごしてきた年月に大きな間違いはなかったと感無量でした」という日を迎えるのである。

六世燕三さんに「ひらかな盛衰記～」の見方、聞き方を教えてもらった。「父と娘が、それぞれの孫わが子を知らないところで失ってしまった、その驚愕と悲しみが前半のヤマ場です。あっと驚く展開もあります。後半、三味線の調子が上がり、非常に力強く激しい場面となります。聞きどころ、見どころの多い作品ですので理屈抜きにごらん頂きたいですね」。

この「ひらかな盛衰記　松右衛門内」は、五世燕三が出演中、舞台上で倒れた時に弾いていた曲である。それだけに「五世燕三師匠最後の曲を六世のスタートにし、地道に文楽義太夫節の芸を伝承していきたい」。この決意をそのままに、5月には東京国立劇場でも襲名披露狂言を努める。

（文・脇本勤／表紙写真・高島悠介）